

5. 乾乳期に重点をおいた乳房炎対策

宇佐家畜保健衛生所 大分家畜保健衛生所¹⁾

○長谷部恵理・病鑑 滝澤亮¹⁾・羽田野昭・(病鑑) 御手洗善郎

【はじめに】管内の乳房炎多発農場において、2013年2月から各種乳房炎対策に取り組んでおり、その結果問題牛の摘発・淘汰等により乳中体細胞数(SCC)を減少させる等の一定の成果が得られた(ステップ1; H25業績)。しかし、併せて乳量の減少も招いていたことから、2013年9月よりSCC等の乳質向上を維持したまま、乳量の回復(増加)を図ることを目標に、当該農場にて乾乳期対策を実施してきた(ステップ2)ので、その概要を報告する。

【農場概要】搾乳牛77頭、つなぎ牛舎(対尻式)、従業員2名(夫婦)、ステップ1以前(2011年4月～2013年1月)の乳質等の月平均は、生乳生産量46,631kg、乳脂肪率3.69%、無脂固形分率8.68%、タンパク3.34%、SCCは27.9万/ml、治療費62,746円となった。乳質パルティは4回/年であった。

【対策内容】①乾乳前検査：乾乳に入る牛全頭(34頭)を対象に、分房ごと(129乳房)の細菌検査を実施し、併せて有効薬剤を決定。②ウシラクトフェリン製剤並びに有効薬剤(適宜)の投与：乾乳から2週間後に実施し、静菌・殺菌作用により分娩後の乳房の正常化・維持を期待。③初乳検査：乳房炎起因菌の感染リスクの高まる時期での細菌検査。④泌乳最盛期検査：正常出荷乳の確認細菌検査(乾乳前・初乳・泌乳最盛期検査は18頭、68乳房、乾乳前・初乳検査は16頭、61乳房)。

【結果】乾乳前に細菌が分離され、初乳・泌乳最盛期に分離陰性となったもの、及び三期とも細菌分離陰性であったものは68乳房中34乳房(50%)、乾乳前に細菌が分離され、初乳に分離陰性となったもの、及び二期とも細菌分離陰性であったものは61乳房中41乳房(67%)であった。

ステップ1(2013年2～8月)では対策前に比べ、乳質等の月平均は、生乳生産量-4,387kg、乳脂肪率+0.06%、無脂固形分率+0.03%、タンパク-0.08%、SCC-7.6万/ml、乳房炎治療費は+2,815円であった。ステップ2(2013年9月～2014年9月)を実施したところ、ステップ1と比べ生乳生産量は+3,380kg、乳脂肪率+0.01%、無脂固形分率+0.04%、タンパク+0.05%、SCC+0.9万/ml、乳房炎治療費は-29,166円となった。

【まとめおよび考察】乳房炎多発農場において、ステップ1に引き続きステップ2の対策を実施したことにより、乳質向上を維持したまま生乳生産量は回復し、さらに乳房炎治療費等の減少がみられた。

以上のことから、SCC対策において治療効果の望めない高SCC牛の特定、淘汰・更新に加え、乾乳前乳房毎の細菌検査を徹底して行い、その結果に基づいた乾乳期中の投薬等を実施することは農場の乳房炎コントロールに有効であり、農場の経営安定に寄与するものと思われた。